日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野　正博

台風の爪痕

京都府北部に未曾有の大被害をもたらした台風23号。実験所の職員や学生にも自宅が孤立したり床上浸水などの被害がありましたが、読者の皆さまは如何でしたか。10日あまりが過ぎた今日になっても、あちこちで道路の不通や泥だらけの田畑、ゴミの山。復旧には時間と労力がまだまだかかりそうですね。

大雨の被害が目立つのですが、漁村では猛烈な吹き返しの北風による被害が続出。府下では150隻あまりの漁船が沈没し、その何倍もの数の船が大破しています。定置網や港の設備の破損もあちこちでおこったようです。実験所の緑洋丸も漂流物があたって大きなひび割れができ、目下造船所の順番待ちです。

さて、洪水で地形が一変してしまった川の生き物は大きな被害を受けています。ちょうど産卵期を迎えたアユは産卵場が泥に埋まり産卵ができなくなるかも知れません。海の生物にもこの台風は大きな影響を与えそうです。10日あまりがたつのに川の濁りは一向に収まらず、由良沖はどこまで行っても泥の海。大量の土砂が流れ込んでいるので、それに覆われた海底に暮らす生物が大量に死んでしまいそうです。

アサリなど海底に暮らす貝の多くは、泥に埋まるとはい出せなくて死んでしまいます。また、アサリやカキなど海水に含まれているプランクトンを食べている生き物は、海水の濁りが続くと濁りを吸い込んで死んでしまうこともよくあります。

実験所の岸壁は台風の波でカキも海藻もはぎ取られ、小さな巻き貝なんかもほとんどいません。わずかに残っていたカキなども台風後の出水で真水が大量に流れ込んだために死んで口を開けています。その上に泥がつもり、さらに大量の漂着ゴミ。おそらくそこら中の海岸が同じような状況でしょう。

このコラムが掲載されるころ、私は学生たちと一緒にWakWaKプロジェクトの調査で若狭の川を走り回っている予定。プロジェクトの目的は、河口域に暮らす生物の生息環境と生物間の「食う食われる」関係が一年を通じてどう変わっていくかを調べること。でも、今回の調査は台風が若狭の川に残した爪痕を記録することになりそうです。

台風23号で壊れた伊佐津川の歩道橋